最近読んだ本

田所金久

「ブックセンターかもがわ」からコロナ危機で経営が危ない。購入をお願いしたいという文書が送られてきた。私はすぐに2冊の本を注文した。全国から160人を超える人から200冊の注文があったそうだ。最近2冊を追加注文。こういう社会とのつながり方もあると思った。自分はどれくらい購入し、読書しているか、この3か月を振り返ってみた。ここに羅列する。

かもがわ出版
・「中国は社会主義か」
・「朝鮮戦争70年」
・「20歳のマルクスなら　どう新しく共産主義を論じるか」（再読）
・「奥深く知る中國」（再読）
・「国連家族農業10年」
・「13歳からの食と農」
・「家族農業は『合理的農業』の担い手たりうるか」

岩波書店
・井上ひさし「社会と言葉」（「12人の手紙」中公文庫も面白い）
・「岩波新書総目録」
・「世界経済図説」
・「イスラームからヨーロッパをみる」
・シリーズ中国の歴史
①「中華の成立」②「江南の発展」（①②は少し前）③「草原の制覇」④「陸海の制覇」⑤「中国の形成」
・道教思想10講
・寺島実郎「日本再生の基軸」・「世界」9・10・11・12月号
・白井聡「武器としての『資本論』」（「国体論　菊と星条旗」も必読）

新日本出版
・浜矩子「小さき者の幸せが守られる経済へ」
・不破哲三「文化と政治を結んで」（再読）

NHKブックス
・「戦後『社会科学』の思想」同時代社
・「新・明治の革命～自由民権運動」

大学の卒論で大変学ばされた、遠山茂樹・羽仁五郎・服部之総や高知短大の外崎光広が登場し、板垣退助編「自由党史」が詳しく叙述され、私の青春を懐かしく思いながら読んだ。私は卒論で「挫折した革命」と規定しながらも、日本の新しい道を開いたと述べた。この本は民権運動が、中江兆民から幸徳秋水・田中正造に受け継がれ、初期社会主義につながる「明治の革命」であったことを見事に証明している。青春の懐かしい読書・研究を思い出させてくれた。

9月の末、親友の林赫史さんから2冊の本を貸していただいた。大原富枝の「ひとつの青春」（S49発行　東邦出版）と「大原富枝　年譜」（2020発行）である。林さんは名前に「赤」が二つあるように、戦前から共産党員として農民運動などを闘った林延造さんの長男である。延造さんは、私が「林延造と槇村浩」でも書いたように槇村浩が「餅の歌」を作って林延造を称えたように槇村をよく知る人であった。したがって、「ひとつの青春」「海燕」を書こうとした大原富江も、「人間の骨」を書く土佐文雄もよく、競うように林延造さんを訪問している。だから赫史さんはこの本を大原富枝文学館関係者から寄贈されたのである。私はこの本を読んで、神童・天才として外国にも知られた槇村と友人弓削の非合法下における命を掛けた闘いと青春に圧倒された。本当に読んでよかった。授業で「間島パルチザンの歌」を丁寧に解説したことを懐しく思い出した。「海燕」で槇村の母の生き方に胸を打たれた。

急いで藤原義一の「槇村浩が歌っている」を再読し、高橋正「高知の近代文学を掘る」の「大原富枝『婉という女』覚書　婉は私である」も引っ張り出してきた。幸せな時間であった。

なお、「人間の骨」は映画化され、私たちは北朝鮮でも上映したいと考えたが、北朝鮮から、日本共産党系の人は入国は認められなかった。

漫画「放射線を浴びたX年後」（原作　伊東英朗　協力：日本テレビ　南海放送）

カバーの帯に「きっかけをくれたのは高知の高校生だった。彼らは被ばくした多くの船の乗組員の聞き取りをしていた」と述べられている。13話からなるが一話「出会い」の冒頭に「ビキニ事件の被害者は一隻の船とその乗組員二十三人だけだと思い込んでいた　――高知県の元教師と出会うまでは」と述べている。山下正寿さんの家に宿泊し南海放送の取材は始まる。漫画の山下正寿さんの顔はやや大きすぎるが、その特徴をよくとらえている。漫画は13話

持った時、重く、何か違うと感じた。調べてみれば、今までより40ページ厚かった。この雑誌の編集者たちが高齢化し、最終号になったのである。ただし廃刊ではなく停刊なので、新しい雑誌の誕生が期待される。第一次安倍政権が教育基本法を変え、次は憲法だと言い出したので、辻井喬や上田耕一郎のアドバイスも受けながら、「本の泉社」から出版した。2008年7月の「創刊にあたって」では、「思想・文化を中心とした諸問題を平和と民主主義、自由と人権、社会進歩の立場から議論することを目指したと述べている。

（左上へ）

「次なるX年後」でおわり、妻が夫のベッドに寄り添う絵と「限りある生命ある身と知らぬまま　未来を語る夫憐れむ」で終るが、原作はテレビで放送され、映画にもなった。

季論21（2020秋　第50号記念特大号）

そして12年、50号で区切りをつけた。1970年以降でも季刊、「科学と思想」「現代と思想」、月刊誌「文化評論」（日本共産党）も廃刊になった。

50号の青木理「凡庸な強権者〈安倍晋三〉」は8年8ケ月の安倍政権の総括としては見事である。大西広は社会運動の自己変革を求める論文で、よりましな世界を求める勢力について論じ、すぐ戦争をするアメリカの覇権より、中国の覇権がましかもしれない、と述べている。日本の革新思想の保守性や中国に対する偏見について改めて考えさせられる。私は創刊号からの読者であった。それだけに感慨深いものがある。

月刊誌『世界』

創刊は敗戦直後の1946年、今年で74年、940冊になった。1000号を目指すと言うが、その時には私はいない。和田春樹は「いま日本では批判的にものを考えて生きることが奨励されない。本当に批判的に考えて、考え抜くという立場を貫いている雑誌は『世界』だけになった。」と述べている。

人新世（じんしんせい）の資本論　斎藤幸平

ノーベル化学賞受賞者が、地質学的に見て、地球は新しい年代に突入したと言い、それを人新世と名付けた。人間の活動の痕跡が、地球の表面を覆い尽くした年代と言う意味である。気候変動を放置すれば、この社会は野蛮状態に陥る。それを阻止するためには、資本主義の際限なき利潤追求を止めなければならない。その解決策は晩年のマルクスの思想の中にある。マルクスは晩年、自然科学と村落共同体の研究に没頭し、共同体の中の平等主義と出会い、「持続可能性」と「社会的平等」をコミュニズムの基礎に置いた。そこから生産力中心ではない、脱成長の社会主義に到達した。共同の富・コモンズを復活させ、生産手段を自立的、水平的に管理する社会を構想した。著者斎藤幸平は1987年生まれ・若手の世界が注目する経済思想・社会思想の研究者であり、権威ある国際的な賞を最年少・日本人初で受賞した。世界各国の研究者が集まってMEGA（マルクス・エンゲルス全集）編集が進んでいるが、彼もその編集者である。NHKテレビ「100分で名著」で資本論の解説をしている。

国連が掲げている「SDGs（持続可能な開発目標）」も現代の危機から目をそらさすもので、温暖化は止まらず、現代版「大衆のアヘン」である。利潤第一の資本主義の経済成長主義は地球を破滅に導く。この危機を回避するためには、脱成長、コモンを豊かにする社会主義しかない。今までの社会主義者は、マルクスが晩年、生産力重視、ヨーロッパ中心の思想を克服し、大きく変身したことに気づいていない。

新聞広告の大きな見出しは「気候変動も、コロナ禍も資本主義が犯人だ」で、続いて「人間の経済活動が地球を破壊しつくす『人新世』の時代」「資本主義が引き起こした、この危機を脱する道は〈コモン〉の再建と、豊潤な脱経済成長だ！」「SDGsは大衆のアヘンである」「なぜ、資本主義では気候変動を止められないのか」「コモン（万人の共有財産）とは何か」「新解釈！進歩史観を捨てた晩年のマルクス。」「3.5%の私たちが動けば、世界は変わる！」と記述している。この広告はほぼ内容を紹介しているが、マルクスの晩年の研究（原始共同体）とその発展については、本を読まなければその重要性について理解できない。晩年のマルクスの到達点を理解しない共産主義思想の誤りと弊害について考えさせられる。

国連家族農業10年　家族農業は「合理的農業」の担い手たりうるか　かもがわ出版

13歳からの食と農　かもがわ出版

この3冊は、論文を書くために入手した。前者は農民連の編集で、農民の生き生きとした活動がよく分かる。後者はドイツの家族経営の取組と、マルクスとエンゲルスの家族農業の価値をたいせつにする思想が学習できるものである。

コロナ・パンデミックと日本資本主義～科学的社会主義の立場から考える～

元・雑誌「経済」編集長友寄秀隆のこの本は社会主義の優れた理論と本質を示している。

第一章　パンデミックとは何か　…唯物史観の視点から

第2章　新型コロナ・パンデミックの衝撃：感染症疫学と社会科学の視点から

第3章　コロナ・パンデミックと新自由主義路線の悪行　社会科学の視点から

第4章　コロナ・ショックによる経済危機と回復過程

従来の恐慌分析とは異なる視点から

第5章　デジタル化社会の可能性と限界　労働者・国民の視点から

第6章　コロナ後の日本資本主義の課題　中長期的な日本資本主義の視点から

第7章　コロナ後の労働運動への期待　経済研究者の立場から

補章　パンデミックとマルクス・エンゲルス

松尾芭蕉は旅に人生をかけ居場所を作った。私は今古代インド哲学でいう、人生の最後の段階・遊行期、しかも足の故障で在宅を余儀なくされ、旅は出来ないが、在宅で心は広く漂っている。ふり返れば教育労働・組合活動・卓球・家庭菜園が、私の居場所であった。仏教でいう「諸法無我」で人々と社会に支えられて生きてきた。今は読書が居場所である。井上ひさしの「書くためには読め」に支えられて。「一冊に集中するな」と言う言葉にも寄りかかり乱読してきた。この文章はそうした私の「私のメモ」である。